



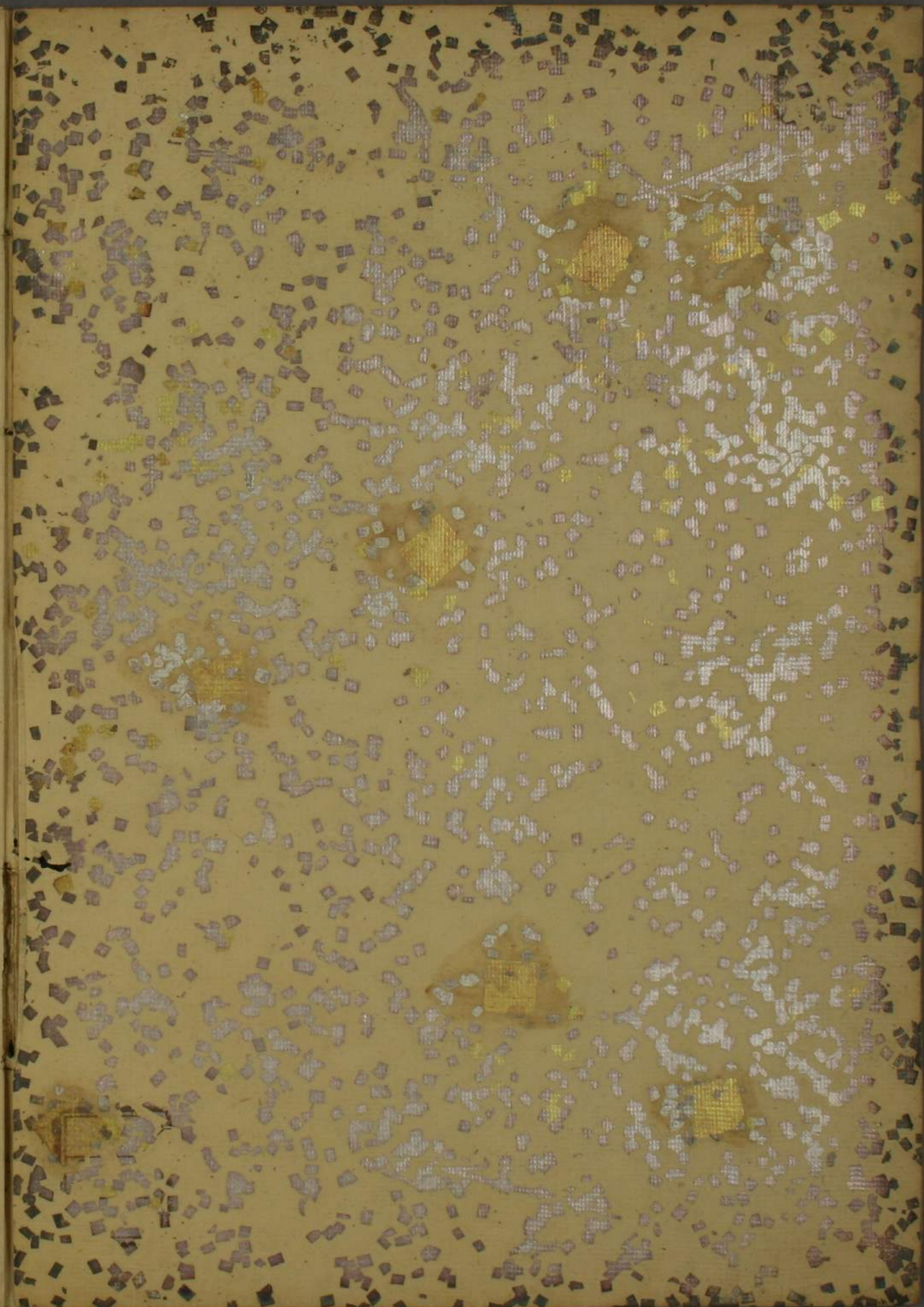
蟹觶無底抄
巴力也

特別
~ 12
1077
17





利
1077
167



関屋

伴与守任常陸下向以来事

是之始末乃其此时分源氏九二

歳之事也

八八歳

源氏歸京次年秋常陸守上洛

事九月廿日

同日源氏石山詣事

常陸守於石山事

自石山出河右衛門枕糸抄迄
右衛門枕糸昔く小君

常陸守卒一玄事

室蟬表為尾事

関屋

以初為表名

世^何も^何り^何き^何く^何れ^何出^何る^何様^何也

う^何こ^何も^何あ^何る^何初^何也^何の^何号^何也

関屋^并い^何る^何る^何関^何あ^何れ^何し^何も^何も^何と^何な^何れ^何と

も^何関^何屋^何い^何る^何る^何初^何の^何号^何の^何也^何文字^何也

用^何て^何初^何也

山^并卷^何横^何乃^何並^何也^何花^何鳥^何の^何号^何初^何也

斗^何り^何

山^何卷^何横^何の^何並^何も^何り^何源^何氏^何九^何八^何歳^何九^何

月申とありり方とたうしれ末の
八歳上月ううしり申との事あり
蓬生のお月乃事申とみいひ
のけまを換れ

^菟豊乃並や保氏君女八歳の事
ううしり方とたうしの事を八月
乃こといそいふけまを九月原
猪のともしけりぬり豊乃並
とたうしり

私に事あり申れり方とたうし
乃末の保女八歳十一カク申との事
ありり事とありやうしり
いことをいしれ巻乃
よの保女ありしれ申と保女
八歳乃九月申とみれとうの野の
事ありし後れ事とあり
蓬生れおの末しすおつむ
れとありり其類ありり

見えし人々の列傳を好む
ありきと空野の君乃列傳と
みえし人々の列傳を好む
豊れ道の河沿もろりとんは
よしよし

作ふりかとうひ
を石院かうれさ
はてしめし

さう本の異し
相違れみし
さう本の異し
相違れみし

空蝉 君れま

源中 十の
と 常陸

空蝉 君れま

空蝉 君れま

空蝉 君れま

空蝉 君れま

空蝉 君れま

藏人右近侍監

係氏大納言にて計院乃程
此より申す所は此の時不貞と
しし人なる事申す所の備と
此より申す所は此の時不
られしなり申す所の備と
よるの松尾よるの備と
りしなり

藏人女将書

宣掾君のまじり申す所の
申す所の備と此の時不
りしなり

あつていかにいかにいかに

宣掾事りいかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかにいかにいかに

いかにいかにいかにいかに

いかに

宣掾事りいかに

いかにいかにいかにいかに
いかに

源をゆと次平一徳長しつゝも
事しつゝも也前よりゆゆんしつゝも
近よりつゝも其勢もかた
あり

系しつゝもつゝもつゝもつゝもつゝも

秋之

ゆゆを蓮生れ次つゝもつゝもつゝも

つゝもつゝも

源氏女八歳よりつゝもつゝもつゝも

つゝもつゝも

一任につゝもつゝもつゝもつゝも

あり源氏を次平つゝもつゝもつゝも

合三年つゝもつゝもつゝもつゝも

つゝもつゝもつゝもつゝもつゝも

のつゝも

せつゝもつゝも

お板のつゝも

つゝもつゝもつゝもつゝも

石山寺

聖武天皇御宇金鷲仙人建立

日記曰聖武天皇師僧正朗弁者先生震且修行者也為求向舍衛國欲渡流淤无功錢數月逗留天皇者流自艱師也不領功錢濟度修行僧既畢尔時伴修行僧為剛固極之息可生將來國王之由致誠祈擔以其念力生日本國王也然而今生樂尽可受苦

因
紫式部觀音
の爰也
りやみ石花
觀音の形も
して中河原
といふところ
言ふ所の
なり

因也朗弁奏云建立大伽藍可為後世之資糧天皇依教喻命建立東大寺奉鑄大佛依无淤金晝夜大息之間夢中有人奏云水邊建立伽藍祈請砂金出来須者爰致驚令求勝地建立觀音像不經幾月下野國初貢砂金今之石山寺是也

こ乃殿〜

伴文子とともて留保の契に入られ
しじうの事と云ふはまゝして候ふ
事と云ふはまゝ候

Benin

車よりぬき候ふ

うらその備へり候

との申す大津と云ふ所より常陸
よりゆり候はれ申すの備へり候
。海と栗田よりえたるはまゝ候

前通のくゝと申すはまゝ候
利

後と申すはまゝ候

ありしはまゝ候はまゝ候
れありしはまゝ候はまゝ候

Benin

昔と申すはまゝ候はまゝ候

なまゝ候はまゝ候はまゝ候

ありしはまゝ候はまゝ候

わが心は花をくらひむらさき

車とともあひあはる

ゆけりいさ

半とともあはるて轆をともあはる

車とともあはるをくらひむらさき

くら

とくらむらさき

くらこれと花をくらひむらさき

ゆけりいさ

車とともあはる

くらこれと花をくらひむらさき

の車とともあはる

わが心は花をくらひむらさき

くらこれと花をくらひむらさき

車とともあはる

ゆけりいさ

私に花をくらひむらさき

くらこれと花をくらひむらさき

まを長わがうてまうれの粒もあ
る也

ま〜のわ〜の〜きぬ〜
ア〜

^何色と 襖 指襖 縫物 結滌

^花将襖いねいお〜と〜と〜
下もや又織〜も〜
乃〜ア〜乃〜海〜

昇回

或水尻〜襖と長裏の綿西布
〜の〜と〜

素襖ん

^花む〜の小畚い〜は〜の
け〜も〜
う〜

ま〜の〜

原の小畚〜の〜

^何ま〜と〜

矣朝例也

諸君更尽一盃酒西出楊園之故

人三停詩 乞も好くと送りての

待(園園外みまらり

行人と送る園とらりて歸と

送るあつて心ひら

おろそ

大いしつらつらつとせおろそ

しつとゆふふそのおろぬん

とらりあつて

空輝一の君れん中らりけ

ふらりつらつとせおろぬん

世と東とせつとあつて海と

多るぬ信あつとくおろぬん

世と東と也

世と東とせつとあつて海と

世と東とせつとあつて海と

世と東とせつとあつて海と

あまのこころをよめること

園は二首とてしるす

私心のこころをよめること

あまのこころ

えとりのこころ

^并空蝉のこころをよめること

あまのこころをよめること

依レまらるるこころ

^苑源氏をよめること

あまのこころをよめること

あまのこころ

^并源氏をよめること

私のこころをよめること

源氏をよめること

あまのこころをよめること

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころをよめること

付右之義も伴ふる子也 次平
くさくさ

とらりささくさくさくさくさくさく
ようくさくさくさくさくさくさく

次平の由候也ぬくさくさくさく

うさくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさく

ある也

世みしたるもなと

その時乃石忠と後悔するさく

世みしたるもなと

よげめくさくさく

右邊の依

ゆきくさくさく

宮解也

とらりささくさくさくさくさく

右邊の依の中

一日にらむしを断し

平
文の初也

源
こくろり心とさうふとらぬ

初らひさしとさうふとらぬ

わくろり解返也

さうふとらぬ海湖海

源
初らひさしとさうふとらぬ

さうふとらぬ海をさうふとらぬ

とらぬ

後院
さうふとらぬ海とさうふとらぬ

さうふとらぬ海とさうふとらぬ

源
さうふとらぬ海とさうふとらぬ

あか

さうふとらぬ海とさうふとらぬ

初文の初より初とらぬ

乃初也源との同り

源
常陰前司代お政の同り

とらぬ

かゝるるを

是より後の旅の如く

いふに

宮野原の如く

いふに

れは

旅の如く又と

いふに

宮野原の如く

私に

いふに

昔より

小君の如く

いふに

私に

いふに

いふに

いふに

お事よしの御座りませう
との御座りませう
と御座りませう
の御座りませう
の御座りませう

お事よしの御座りませう
との御座りませう
と御座りませう
の御座りませう
の御座りませう

お事よしの御座りませう
との御座りませう
と御座りませう
の御座りませう
の御座りませう

お事よしの御座りませう
との御座りませう
と御座りませう
の御座りませう
の御座りませう

うつ野のうづりしと一戸のうづり
それ瑞ふもわらへ

そしこのそれさつちし

まよ子乃地

^{此元野}あふさの関せらるるは関みれらるる

うげさの中とさへくら舞

^其関屋いゝるるとはたてあは

^花お取乃実を枝乃木法ととれ

あけさうのうづりしとあは

私さげさるる木がさへさるる西は

うづりし葉氣しとあつたのふ

海と元野れさの事とあつた

お取と意海乃事とあつた

あ

あれはさるる

と一戸のうづりしとあつた

うづりしとあつた

事あれらるる

葉を

あつれよし

あつれよし

あつれよし

あつれよし

あつれよし

あつれよし

あつれよし

あつれよし

子とのあつれよし

あつれよし

あつれよし

女君のあつれよし

あつれよし

あつれよし

あつれよし

あつれよし

あつれよし

侍ふ命の心

いそよのくれば海もあつて海

あつて海

花 ころもあつての心常とて

いそよのくれば海もあつて海

花 花もあつて海もあつて海

わつとつて神の心もあつて海

あつて海もあつて海

侍ふ命の心

あつて海

侍ふ命の心もあつて海

いそよのくれば海もあつて海

あつて海もあつて海

あつて海もあつて海

あつて海

あつて海

あつて海もあつて海

あつて海

少なりともあゝあゝ母のよきこと

信也の生れも感懐も皆あり

まれば此と

みけさのあしきこと

空蝉のうきこと

おのうけうらむけふ

何れも紀伊も(空蝉)心とけ

しるすこと

らむと海にさかぬ

空蝉のうきこと

うきことせむらふこと

空蝉の我がれうらむこと

わすれに成るなり

空蝉の尾のうきこと

何れも

空蝉れつらんこと

あゝもらむこと

紀伊も我れとらむこと

